

人間のための科学とはどう いうことか

前 川 知 賢

I

最近人間のための科学ということが高唱されるが、これは、従来の科学技術が人間のためにあるべきだという本来的在り方から外れて、われわれ人類をスポイルし、その福祉を阻害するばかりでなく、その生存を脅やかし、われわれの存続を危くする迄になり上ったという現実を前にして、これを本来的なものに返し、真に人類の要請に合致せしめねばならぬとの、われわれの切なる願望を念意するものなのである。いうまでもなく、科学による人間疎外は今にはじまったことではなく、すでに近代のはじまりからあったのであり、われわれは産業革命の開始と共にそういう宿命を自らの中に背負い込んだのである。否、ルソーなども論じているように、そもそも人類が文明とか開化とかいうことをいはじめたその日からそれは始まっていたのであり、その淵源は古く且つ深いのである¹⁾。乍併、このことが今、特にこの時期にこの国でいわれることには、今少しく現実的な意義があるのである。爾来われわれが機械に使われるとか、科学技術はむしろ人類を滅亡に導くとか、あるいはわれわれはいわゆる管理体制にしばられて寸断され、身動きもできぬようになっているとかいうことが刻々として進行したのだが、それが今や極限に達して極まり、われわれがこれに対して何らかの反動を加えざるをえぬところに迄追いつめられたということこそそれは意味するのである。かかる事態を具体的に例示すれば、すでにわれわれの愛すべき何十万の同胞を殺戮し去った原爆がそれであり、最近では公害とか、物価高・インフレーション・所得格差の増大などいわゆる成長経済のひずみ現象をす

らこれに加えるであろう。われわれはこれによって文字どおり死滅寸前にありというも過言ではないのである。そして、このことの中には、このことが契機となって、われわれがようやくそこから身を離し、一歩退いて反省する段階に達したということも含まれているのであり、これらのことが今回の叫びの原動力となっているのである。

就中この第二のことが重要である。哲学的にいえば、これは少し大きいかもしれぬが、歴史の方向に対して意識的にストップをかけようとしたということであって、例えばニーチェが神々の死を宣言することによっていわんとした、(時間と進歩に支えられた)近代の克服ということすら意味し、又本稿主題の〈対抗力〉を指示するからである²⁾。

かかる両面の性格を押って興味あるのがいわゆる成長経済であろう。たしかに成長経済が志向するところには、自然必然性、因果の鎖りに対する反抗があり、それがわれわれに〈自由〉を意識せしめたことは大きな功績である。それはすべては変化せず、人間は自然法則に従う外ないといった信仰を打破したのであり、その限りわれわれの自由の回復に寄与するものである。しかし反面そこにより多く欠陥のあることも事実である。科学技術の一段と加重された支配は勿論、上述のごとき、いわゆるひずみの現象がそれである。人間性の回復ということは、単に従来の必然力の支配に対する反省ばかりでなく、こういった成長経済論への反省からもでていたのであって、今くわしくはいわぬが、更にこれに最近特にやかましくいわれる情報科学とその提唱する社会理論に対してすらこれをなさねばならず、かく思惟し来れば、本問題は極めて徹底して且つ広範囲な射程をもつものなのである。

実存の哲学者ハイデッガーによれば、われわれ現代人は〈ひと〉(Man)の中に埋没してその実存においてあることは稀れであり、たとえ実存に帰ろうと希求してもすでに故郷喪失しているのであり、いつこへも帰ることはできず、結局その中間的領域を彷徨するの外ないという³⁾。まことにその言のごとく、人間は世界と自我、ひとと本来的実存、個人と社会、物と心といった対極の中間に立ちすくんで、その何れに偏

しても救われず、まさに永遠に浮動するの外なく、これがわれわれ現代人の宿命である。ハイデッガーの分析したところはいふ迄もなく、実存哲学的見地からであるが、一步転じてこれを現代の科学技術や社会関係についてみる時、更にきびしく且つより限界状況的なものがあるのである。ハイデッガーにはまだ文学的表現も可能なほどの甘さがあった。然るに、現実の世界に就いた場合、そこにはロマンチックな表現をもってなしうる一片の余裕も見出されないのである。われわれは未だ鉄鎖にしばられており、機械に酷使され、科学の脅威にさらされているばかりでなく、日夜金銭と生活に追いまくられて一日として安きを能わぬのである。そして、このことは成長とか未来とかいったかけ声とはうらはらに日に日に加重されつつあるのである。人間のための科学という叫びは、実にかく、われわれ人間の在り方にかかわる存在論的に加えてより根源的事由から発しているのである。

こういった限界状況を前にしてわれわれは何をなし、いかにあるべきか。すでにこのことについても巷間多くのことがいわれ、又幾多の提案がなされているが、私をしていわしむれば、われわれは今こそ文字どおりのラジカルズムに立脚するの要があり、そのためには、歴史の進行を一時ストップして、(イ)まずもって人間そのもの、しかもあらゆるドクマ、イズムは勿論体制や組織から解放された〈自体的〉人間に立帰ること、(ロ)しかも徒らに観念的空想的に墮することなく、そこから如何にして現実に至ってそこでの諸問題を解決しうるかといった具体的諸プランをも併せ具備した理論をなすことが不可欠であり、然らざれば説得力を得ないと愚考するものであるが、こういった見地よりみる時、現在行われている提案や理論の殆んどすべてに対して同じえないのである。観念的で甘ったるい哲学的諸論は勿論、表見ラジカルのように実は予定調和説にすぎぬマルクーゼのいわゆるエロスの原理にも、全体科学的であることを目標としつつ、すべてを行動科学的の一面にのみ局限するいわゆる未来論のシステム工学論にも、現代がそこから発した故郷に立帰って不断に生命力を汲みとろうとするいわゆる始源論、原点論にも、否さ

らに、最近流行し、もっともラヂカルを標榜するキリスト教的終末論に対してすら同じえぬのである。それらのものは、上記二個の標準に照らして、あるいは根源的の点で欠くるか、又は根源的であったとしても観念的空想的で現実に対する効果を欠如しているかであって、何れにしても完全とはいえないのである。ここにそれらに対抗して些か卑見を開陳した所以である。勿論粗雑極まるもので、その志向の旺んなるに比し、存外陳腐であるかもしれなず、又実証的側面において幾多の認識不足をもっているかもしれず、切に各位の御叱正をお願いしてやまぬものである。

予め、私の予定を申上げると、この問題はわかれて二つになるのではないかと思われる。即ち、ひとつはその理論的考察であり、ふたつは如何にして非人間的科学を規制して人間のための科学たらしめるやの実践的方法の考察である。いう迄もなく両者は共に不可欠であって、その何れの一を欠いても完全とはいわれないが、就中強調さるべきは、すべての理論は右の第二の、実践化の方法を含むべきだということ、いかに深遠なる哲学論といえどもこのことを欠如しては、全くの画餅ということになるだろう。

以上の点から、私はつとに高らかに理論の実践的性格を謳いあげたマルキシズムの精神に組するものである。いう迄もないことだが、マルクスにとって問題は世界を解釈することではなく、これを変革することであり、しかして従来の哲学がなしたのは唯前者のこのみであり、これに対し後者のことをなすのが外ならぬ唯物弁証法であるというのが、その不抜の信念であろう。マルクスによれば、諸科学をして非人間的たらしめるものは結局資本主義的生産関係であり、そのもつ私有財産制である。従って私有財産制の揚棄こそ疎外の除去に至る道であり、科学の人間化も亦そのことによって招来されるのであるという。最近サルトルがこれに実存を加えたことは知られているとおりが、これはマルキシズムが弁証法的運動をいいつつも著しく決定論へ傾斜したことの是正策と

していわれたことであって、いずれにせよ、理論の実践的性格、変革に着眼したところに他を抜くものがあり、すぐれた考え方といわざるをえぬ。

とはいえ、マルキシズムにはたしかにすぐれた点があり、就中そのつよい実践的性格に於て然りとはいえ、われわれは一脈不満をも禁じえないのである。現代の状況は複雑多岐であり、同じく実践的変革をいうにしても、いささか単調にすぐるものがありはせぬかということである。われわれは現代の状況に即応して更に一段と木目こまかく且つより全体的なる理論をなすべきである。そして、こういった点から、私はマルクス説に更に例えば、ガールブレーズの〈対抗力〉の理論のごときを付加することが適當ではないか、就中経済社会の問題については然りとの感を有するものである。ガールブレーズのいわゆるテクノストラクチャーは経済社会に於ける変革原理であるが、彼はこれにもあきたらず、更にこれに対抗して、教育科学芸術の分野からの反逆が生起し、人類の解放はこれを俟ってはじめて完全であるというのであって、今のわれわれにとって極めて示唆的である。以下まずはじめに理論的考察をなし、最後にこういった実践面についての考察をも付加したいのである。

II

人間性と科学の関係ということを考える場合まず一考すべきは、科学の意味である。科学といっても極めて広く、それは多くのパリエーションをもっているからである。通例科学といえば、自然科学や物質科学のことをいうのが普通であるが、しかしそのみが科学でないことは勿論で、政治学や経済学のごとき、いわゆる社会科学があり、又精神科学や文化科学もある。以下私が考察の対象とするのは、主として経済学であるが、しかし大いに関連があるので、次にまず自然科学及び精神科学について本問題に関する限りのことを考察し、その在り方について述べることから始めよう。

自然科学、物質科学が技術化されることによってそれがわれわれの禍

福にかかわる大宗であることはいう迄もない。それがかかわるところは従来主としてハードな欲求に対することは周知のとおりで、われわれにとってプラスをもたらしたことの大きであったのに正比例してそのマイナスも亦大であるというのがその偽りないバランスシートではあるまいか。そして、そのマイナス面の最たるものが原爆であり、化学兵器であり、いわゆる公害源の技術であることは、喋々する迄もあるまい。今ここでは、特に原爆などいわゆる兵器科学について考察することにする。

原爆や核兵器の害悪とその廃絶乃至使用制限の要はこれをいかほど強調しても過ぐることはないのだが、しかも現実はいわれわれのかかる悲願とはうらはらにますます増強され、加重されるばかりである。われわれは万一の過失を恐れるものであって、それが生起せぬとの保証はどこにも存在しない。しかしながら、そういったことは暫く扭て置き、われわれは考えられるだけのことは考え、やれるだけのことはやらねばならぬ。いわれるとおり、われわれの目標はいわゆる原子力の平和利用だが、そこに至る過程として、まず考えられるのは科学者の頭の切りかえだろう。科学者をして兵器をつくることの非を悟らしめ、そこから身を退かせるか、あるいはそれを漸次平和利用へと至らしめるよう叫ばしめることであるが、しかしこれが尋常一様のことで為しがたきは、全く明白なことである。いうまでもなく、彼等は組織の一員であり、組織によってそうさせられているのであり、更にその組織の背後には独占資本主義があり、国家権力が控えているのであり、さらにその背後には〈大国〉の論理があるからである。一片の説教や一冊の精神科学書が科学者に対して有効な作用を及ぼしうるなどということは、まさに一場の夢想にすぎず、児戯に類する底のものでしかありえぬことは、火をみるより瞭かである。根本は大国の利己主義との対決であり、国家権力や独占資本主義との対決である。又組織との闘いである。反民主勢力との闘いである。サルトルのいう〈参加〉であり、〈対抗力〉の高揚である。

われわれの拠るべきは、心性と倫理のラヂカリズムである。今、主として理論の面について考察すれば、カントはひとりの正しい人を救うた

めに千万人の悪人を罰するも可なりという徹底したリゴリズムを持したが、われわれも亦われわれの従来の世界観を百八十度転回してまず人間そのものに立帰り、そこから遡及して社会関係に至るべきである。即ち大国から国家、国家から独占資本主義や軍部、独占資本主義や軍部から個々人へと下降してゆくのではなく、正に逆にまず個々人の立場に立ち、そこから上昇してもろもろの社会関係と至るべきであり、且つその基礎、原点たるべき人間には、根源的に斬新な、全くの自体的人間をもって当つべきです。われわれの出発点は、すべてのイズムやドグマ、組織や集団から離れた文字どおりの自体的人間であり、且つそれは同時に完全なる道徳性や能力を具備した理性人であらねげならぬのである。

とはいえ、かかる原点としての自体的理性人とは具体的にいついかなる人間であろうか。まずそのものとして考えられるのが、ルソーがその『人間不平等起源論』で展開した、いわゆる始源的自然人があげられるだろう。ルソーの考えた自然人がいわゆる野蛮盲昧の太古人ではなく、全くの論理的虚構で、後に彼が『社会契約説』で典拠とした、全体人とは区別される一般意志の担い手としての完全な個人、主権者としての〈人民〉であることは周知のとおりであろう。そして、カントがこれを継承して、いわゆる実践理性の主体、この世においても果又この世の外においても何ものにも替えがたい、目的そのものとしての人格となしたことも亦然りである。しかしながら、こういった人間をもってしても未だ不十分なのである。なぜなら、ルソー的自然人も結局は〈近代化〉の原点にすぎず、その中にはいささかも超近代の原理が先取されていないからである。近代化とは何かといえは時間と進歩の神活を基礎とする単線的な前進の原理であろう。今滅亡にひんしているわれわれにとってこういうものは異質的である。われわれの目標がこういった近代の超克にある以上、いかに始源的とはいえ、近代化の原理をもってしては足らぬのである⁵⁾。ここで、われわれは、当来の〈人間〉のモデルとして、近来一部の人々によって提唱されている終末論的人間に想到せしめられるのである。

抑々終末論は「終末を設定する時、世界は歴史化するものであり、従ってそこから世界を考察することは、歴史としての世界を発見し、その運命を探求するゆえんとなる」ということを根拠とするもので、このことは例えば、「人の死なんとするや声やよし」といわれるごとく、終末に臨んでどんな兇悪な人間も本然に帰るといふ俗諺によって裏証されるのである。原爆や公害がまさしく終末への徴候であるとするならば、かかる終末論的人間観は今のわれわれにとって極めて適切有益の提唱であり、その大筋においては同調しうるのだが、但し昨今この国で行われているごときそれに対しては、必ずしも然りとは申しがたいのである。例えば、最近『終末論的考察』(中央公論社)なる一書を刊行された大木英夫氏の所説がそれで、可能性や明るい面を強調するに急にして、いかにして現実の諸問題の解決をなしうるやの具体的コースに關しては、もっぱら神々の復活、主の賜物といった信仰に逃げて、唯の一言も吐露されようとしなからである。私をしていわしむれば、神々の復活に期待し、主の賜物に甘えるとは全く逆に、全的に従来の方角を止揚して、一切を自己責任において再び零度から立て出なそうという対抗的決意あることによるのみ、そのことはなされるのである。そういった勇断に踏み切る時にのみ新生の声は聞かれ、未来からの光りが走り来るのである。いささか狭きに失するかもしれぬが、私はかく思うもので、原爆の廃棄も、核兵器の縮減も、果又戦争の消滅も、まずもってかかる人間革命に立脚することによるのみ、その大義を得、人々をしてそのための行動へと駆り立てるのである。われわれは今や終末論的人間観をすら超越すべき時に際会しているのである。諸問題の解決についていえば、神々に甘え、主に祈るのみでは何ごともなされず、一步も前進しないだろう。現代の問題はどの一つをとってみてもむつかしく、どんな勇断をもってしても殆んど前進を期待しえないというのが偽りないところだが、しかしこういった決意の場合は別で、原爆の廃棄についても存外大きな奇蹟を生むことも考えられるのであり、しかしこのことはそれにふさわしい現実的対抗力の伴うことを前提とするもので、全的転換と共に

それと並んで、科学的で周密な具体的コースと、それに見合うちからづよい実践とが考究され具備さるべきことも亦不可欠である。

Ⅲ

第二に、確乎として定立すべきは、当来の人間が精神的に次元の高い道徳人であるということ、その点より、われわれは同じく人間解放を唱え、人間性の回復をいう精神科学、文化科学の分野においてすら、近代化と方向を同じくする、その志向の低次元的なる学説に対しては同調しえぬのであって、例えばプラグマチズムのごとき、その一たるを失わぬのである。私をしていわしむれば、機械をして跳梁せしめ、経済をしてわれわれに君臨せしめるものは、機械そのもの、経済そのものではなく、まさに機械をつくり、経済をしてあらしめる人間そのもの、人間の欲求そのものなのであり、万悪の根源はまさしく脚下にあるのである。大變天の邪苦かもしれぬが、現在の危機を救うものは人間革命であり、われわれ自身の道義的回生を措いて他になく、まずもってわれわれ自身の上を反省し、その科学に対する在り方を百八十度転回すべきなのである。問題は機械や経済との闘いにあるのではなく、まさしくわれわれの、われわれの内なるものとの闘い、その次元間の確執と克服とにかかっているのである。

そして、この観点よりして、再検討されねばならぬのが、プラグマチズムの人間観竝にその科学との関係論である。プラグマチズムにも説があるが、以下主としてデューイのそれについてその間のことを展望してみよう。

デューイによって人生の目的は思想ではなく行動することであり、しかし、これが道具、手段としての役割を果すものが知性、特に自然科学的知性である。原始社会においては、不斷に必要と欲求とがおそい来り、人間はこれを充足せねばならぬ。かれらはそのため環境にはたらきかけ、行為の仕方を決定する。しかして快苦の感情に従って行為するところから、苦痛の少い、快適な方法が固定的となり、習慣化する。とこ

るで、欲求や環境はたえず変化するところから、固定的となった習慣との間に内なる衝動は対立抗争するが、このものは盲目的であるところから、これに何等かの方向を与えるものが必要となる。この役割を果すものが即ち知性なのである。だから知性は独自の価値を有するものではなく、衝動に方向を与える機関、道具にすぎない。就中知性はその効果をあらわすのは、欲求が何等かの障害に遭遇した場合で、知性はその原因、打開の方法を見出して欲求を助けるのである。そして知性とは、デューイにおいては主として自然科学的知性、いわゆる科学技術を指し、精神科学も自然科学的方法を援用することによって著大の進歩をなすのである。

以上がデューイのプラグマチズムの大要だが、これはある点では正しい。就中精神科学も自然科学的方法を援用することによって効果をあげるといった辺りにおいて然りで、われわれはこれに異を唱える節をもたない。唯、問題はそのいわゆる欲求とは何か、衝動とは何かということ、この点がひっかかるのである。端的に言って欲求とか衝動とかいうことは生きること、行動することを意味するが、われわれはその低次元性にあきたりぬのである。

一般にいわれているようにデューイの欲求をもって外的肉体的のものとするのは、必ずしも正しくない。デューイにおいて主潮となっているのは〈人間〉であり、しかしてその無限の進歩に対する憧憬と信仰とである。かかる人間は決して外的なものではない。「人間の内面的プロセスを外的条件によって決定されたものとして、あるいは外的条件を変更するものとして」研究することがその主題である。そこでは神のみちびきと、その与える秩序への信仰が生きており、その限り、そのいわゆる人間なるものも、決して単なる外的なものではない。しかしながら、それが具体的に何かということになると、それは行動によって達成され、習慣化されるところの自然的経験、直接的経験ではあるが、究極するところ日常生活を楽しむといった生命的価値に外ならず、知性を道具として環境との間に可及的〈快樂〉を拡大してゆくということである。

その結果は極めて重大である。科学を駆使するの果て、われわれの無限の欲求、しかもより低次元の欲求を自己増殖せしめ、はびこらせ、ついには逆に自立的に人間に対して迫るものたらしめる可能性がそこに許されているからである。われわれはプラグマチズムこそまさに近代性の最たるもので、そこに今日の疎外を招来した根本的原因のあることを知悉せしめられて、にわかに同調することができないのである。科学そのものはむしろ中性的、無記なるものだが、これをして害悪たらしめるものをわれわれはプラグマチズムにみるもので、今やこういったことに対する反省が求められるのであるまいか。われわれはまずもって脚下を顧み、自己の内なるものとの闘いを開始すべき時に際会しているのである。

IV

経済の世界における人間性回復の問題は二つの側面に分けて考察することができる。ひとつは機械と人間との関係であり、今ひとつは経済社会における人間性の問題である。まず前者から考察の歩を進めるであろう。

最近いわゆる未来学の進展に伴い、われわれに対してまさにバラ色の未来図が展開している。今主としてライフサイエンスの与えてくれるそれに限って述べると、近未来(1970—2000)に於て新しい薬剤の開発、異常環境のコントロールがなされ、中未来(2000—2050)に於て医学、生物学と技術との統合と分化、人工臓器、サイボーク(人間と機械との対話)、遺伝生物学の発展がなされ、更に遠未来(2050—2100)に於ては胎児外科、人工生命の合成、体外受精、脳移植、脳と電算機との対話などが可能になるという⁶⁾。まことに結構なことだが、しかし今この時点に於て足下をみれば、われわれは未だ機械に使われるという段階を脱しておらず、流れ作業や深夜作業、疲労と単調感といった、原始的な束縛の下に釘付けにされているのであり、ここしばらくの間はこれらの事態が好転する可能性は殆んど閉ざされているといっても過言ではないのであ

る。以下少しく機械と人間との関係について現在竝に今後の問題点について一考してみよう。

この間のことについてわれわれがまずもって確と銘記して誤たざるべきは、われわれが決して機械の効果をみすみす放置するがごとき愚をなしてはならず、従ってラダイトのごときは採るべきでないということである。機械至上主義を奉じて一切の手工業を追放するがごとき野蛮事をなすべきでない分野の存することが事実であっても、生産技術や動力等の分野において古えに帰るがごときは愚の骨頂であり、われわれはむしろ大いに科学技術のちからを利用し、究極的には省力技術を極限にまで推しすすめて、オートメから無人化に迄至るべきである。マルキシズムにいわゆる千年王国がまさにそういった世界であることは周知のとおりで、われわれは、〈公害〉の除去は別としてそこ迄推進すべきであろう。

そして、この点で警戒すべきは、いわゆる機械の中における人間化、機械とのなれあいの現象である。故如何となれば、仮りに流れ作業の中に於てひとりが自己特有の〈人間らしさ〉を発揮したりとせんか、忽ちにして全工程は破壊され終るからで、われわれはむしろテーラシステムにおけるごとく、完全なる機械化を要求されているのである⁹⁾。例えば、大工業を廃して中小企業に解体せよとか、流れ作業を廃してこれに手工業的要素を付加せよとかいった論も、すべてこの種の謬論というの外ないだろう。テーラシステムはより以上の機械化、流れ作業はオートメ化によってより以外その害悪を除去しようがなく、それ以外の仕方¹⁰⁾は誤りである。われわれの目標は全工程のオートメ化であり、無人工場¹¹⁾化である。マルクスもいったようにその暁に於てはじめて肉体労働と精神労働との区別は撤廃され、働くことが喜びとなるのである。

とはいえ、オートメ化の暁すべての労苦、すべての負担が消滅するという事も当らぬのである。なるほど肉体的負担はとりはらわれ、われわれが機械にしばられる面は霧散するであろうが、しかし又別に精神面のそれが加重されることは、必然であろう。次に少しくこの間のことを展望してみよう。

およそオートメ化ということには二つの意味がある。第一は、それによって肉体労働の多くが機械によってとって代られ、それだけわれわれはわれわれの労働を機械に転嫁しうるということであり、第二は、機械は自己調節を行い、一度作業を開始するや彼等自らのプログラムに従って進行するところから、われわれ人間の指導を俟たないということ、これである。この二つのことが、機械に対するわれわれの関係を変え、簡単にいえば、われわれはそれによって職人ではなく、制約者となることができるのである。伴ってプラス、マイナスがあり、われわれが却って機械に順応して生きねばならぬことはマイナスではあるが、しかしそこにいわゆる職人時代とは比較にならぬプラスがある。われわれが機械に対する従僕から、逆にその主人となるといったことがその尤なるもので、これはわれわれの人類のプライドを倍加する所以であろう。アメリカのジョージア工大教授で、『オートメーション、その経営と人間に対する影響』なるベストセラーによって広く知られるウォルター・バッキンガム（Walter Buckingham）博士のいうところによると、オートメ化の効用は工場の清潔さ、職業病の減少の外、右に述べたごとき、人間の地位の向上がその最たるもので、要約すると次の如くである。「人間の労働は、もちろん、なお一層重要となる。労働者は機械に対する統制力を一層発揮せねばならぬからである。仕事の技術や手先の器用さ、忍耐力といったものは能力の基準から外され、又生産促進計画といったものすらなくなる。そういうことは機械のすることである。代って、機械を制御する機会が増すのであり、そこに各自の能力を生かすことができる。それは生産高や作業時間では測りえず、又理論的にも捕捉しがたい目的を労働者に与える。それは仕事と自己自身に対する品位といった言葉であらわすのが最もよい表現であるようなものである⁸⁾。」

しかしながら、足下をみる時、こういった境地がわれわれにとってまさにユートピヤ的桃源境にすぎないということも、就中この国では偽りではないのである。ホーソン工場の実験で一躍その名をなしたメーヨーによると、彼の地に於て執拗に残っているものが疲労と作業における単

調感であり⁹⁾、かかる宿命的限界状況克服のための実験をなしたとのことであるが、私はさらにこれにこの国における夜間作業、就中終夜労働を加うべきであると思う。この国において特に大工場において行われていることは周知のとおりで、二交代制又は三交代制の方式がそれである。例えば三交代制であれば三週に一週は6—7日間つづけて終夜労働をなさねばならぬのであって、しかしてこれが機械を止めることのロスを防止するに出づることは喋々する迄もないところで、まさに人間よりも機械を重しとする格好の事例であろう。しかも全国工場労働者の中60%以上のものがなおかかる束縛の下にその一生を屈せしめられているのである。(このことを指摘した人は少いが、私は前々からこれを知悉し、痛ましく思っているものである。)

V

経済の世界には経済の世界の法則があり、人為によって動かしがたいとの認識は、いわゆる公定価格制の維持しがたい一事によって明らかである。戦時中いわゆる公定価格制が実施され、厳格な制約が課せられたものの半面各所に闇市場の生起したことは未だわれわれの脳裡を去らぬところであるが、敢て喋々する迄もなくそれはいわゆる公定価格がそれにふさわしい真の経済価値を表現しないからであって、むしろ闇価格の方がより適正なる実勢価格なのである。今日共産圏諸国に於ていわゆるバザールのごときものが存在して必要悪として公認されている一事に徴してもこのことは明らかだろう。経済学者はこの事実をうけて経済法則の自律性を主張し、経済の世界に経済外の価値判断の侵入して来ることを峻拒してゆずらないが、しかしそういったことは果して正しいことであろうか。さらに近來経済学は一段と進歩し、いちぢるしく科学的となり、就中数量化を方法とする、いわゆる計量経済学なる一派を生ぜしめ、それらはすべてを計量化してゆずらず、ますますその領域を拡大し、強化しつつあるのだが、しかし、そういった行き方に果して誤りないものだろうか、というに、われわれはかれらがそのことを経済的なる

ものの領域においてのみ主張し、又実践している限りでは何もこれに異を唱うる筋合いではなく、それはそれとして認容するにやぶさかでないものの、一歩進めてかれらが経済法則のオールマイティを唱え、いわゆる精神的な世界、質の世界に迄拡張し、強行して来る限りに於ては、かれらに同調することを拒否せざるをえないのである。しかも現実をみるに、かれらのインパクトは活発且つ強力であって、反動的にわれわれもこれに対して攻勢的とならざるをえぬのである。いわゆる経済性の中へ人間とか、人間のための経済とかいった叫びが即ちそれである。今日この声がいかにかまびすしく、又事実その要がいかに大であるかは、敢て喋々する迄もないところである。経済とはもともと経世済民の義であって、その本来的目的は人間の福祉の増進、人類の幸福のためにあったはずである。しかるに今や主客その地位を転倒し、経済が人間に奉仕するのでなく、人間が経済に奉仕することとなり、学者又その本来的使命を忘れてもっぱら経済法則の分析や計量化に耽けることをこれ事としている有様である。われわれは一日も早くこのことを改め、経済に対する人間の失地を回復すべきで、その要はいかほど強調するも過ぐることはないのである。抑々経済法則とは何か、その支配力は絶対的なものであろうか。又すべてが量化されて、質的なものは余地も価値もないものだろうか。経済と人間との関係如何。

問題は別れて二つになる。経済法則はどこ迄その妥当性をもつか、果してそれは自律的必然的なものであるかどうかということと、いわゆる量と質との関係をいかに考うべきかということとがそれである。

まず第一の点からいえば、問題の核心はまず経済法則の妥当力を確定することである。ところで、この点について最近学界に大きな変化があったことは、注目されてよい。経済法則がわれわれ人間の如何ともなしがたい鉄則だとの定説に疑問が持たれはじめ、破られようとしていることで、そこに一つの突破口が開かれたわけである。かかる思考が左右両翼の世界でひとしくみとめられはじめたことは、その意義を倍加するものである。そしてその口火を切ったものが、最近におけるいわゆる成長

経済論であることは知られているとおりで、経済の世界が必然の法則によってしばられ、身動きがならぬとは、ひとり資本主義の経済理論においてのみならず、社会主義共産主義のそれにおいても、否この世界においてこそよりつよくいわれていたところだったが、該説はその双方を責めて、経済法則は〈必然的〉なるものではなく、そこにわれわれ人類の意志の介入の可能性をみとめざるをえぬと宣言するものである¹⁰⁾。成長派がそのことの典拠としてよく引用するのが、いわゆるケーンズによる公共投資をもってする不況打開の操作であることは、知られているとおりである。勿論ケーンズとて、人間の自由が完全に実現されるとはみておらず、経済世界への介入も、個々人のちからではなく、国家の政策によってなされるとすることは、いう迄もない。

さて、このことについて如何に考えべきかというに、だからといって経済が人間の意志に完全に従属するようになったとはいいがたいが、しかしそこに大いに介入の余地が増加したということは、誤りない。

で、一步すすめてこの間のことをさらに詳しくいうと、周知のとおり経済の世界は生産力と生産関係とからなっており、更にその上に観念の世界がある。マルクスのいえば、生産力は下部構造で、これがすべての土台であり、生産関係及び観念界はその上に聳える上部構造にすぎない。ところで、マルクスに於ては生産関係は一義的に生産力によって決定され、その逆の上部構造からする生産力への反作用はこれに比すれば微弱である。いわゆる成長経済下に於てもこの事情は大差ない。介入力が増加したからといって、そのことは、われわれが生産力を完全にコントロールしうるとか、われわれの意のままに変更しうるとかいうことではない。われわれは依然として生産力の発展を必要とし、又欲すべきである。われわれの生産力に対する支配力が増大したといっても、それはわれわれが生産力に即応し、これを助長する限りに於てである。だからといって、生産力をして唯我独尊的にのさばらす必要はどこにもなく、われわれの意志力によってこれを變形すべきであり、そしてそれは事実不可能事ではなく、よってよって、「技術の発展をわれわれの生活に役

立てる」とか「経済成長の余沢を勤労大衆の中へ吸収する」とかいうことも、決して夢ではないのである。われわれはこの点で成長経済論にしてからが未だ大いに消極的なることにあきたりぬのである。

その格好の事例が現下の物価問題で、これは周知のとおり現下の日本経済にとって難問中の難問だが、しかしそこに打開の方策が皆無ということではない。唯ラジカルであるかないかがその岐路にすぎないのであって、具体策としては、まず悪なる物高上昇と必要悪とのそれを区別し、後者に対してはこれがある程度認容しつつ、前者に対しては強力なる施策を打出し、さらに両者の相乗効果をもたらさざるよう配慮すべきであろう¹¹⁾。いう迄もないことだが、現下の物高価は労働力不足によるコスト・プッシュ要因にダイヤモンド・プル要因、構造的要因、さらに海外インフレの輸入といった要因迄が加わって、それらが協働して作用しているのである。いわれているように、高度成長下における必然的現象であろう。しかしこれとて、結果として判断してはならず、これを打ちくずす方策がないというのではないのである。この点、成長経済論は独占を排除しえていないし、又計画の倫理性とラジカリズムに欠けるところがあるのである。と共に、われわれはさらにそれ以外のところにある物価高騰の諸原因を追求し、これを悪なる上昇として把握すべきであって、例えば資源配分の適正化、労働生産性の上昇率などといった点について一段と周密なる配慮を怠らざるべきである。経済法則の可変性、その介入については、一定の限界の存在を前提として歩をすすむべきだが、不可能ということはないのである。われわれが宿命論決定論を容認せざるべからざる必然性はどこにも存在していないのである。

VI

以上経済法則についていったことは、又そのままいわゆる〈計量化〉にもあてはまり、否前節に於て展開したところはそのまま計量化と質との対立ということと同一の事柄の表裏に外ならぬのである。近経といわずマル経とはいわず現代の経済学はいちぢるしく計量化の方法に傾いて

おり、その極一つの独立したジャンルとしていわゆる計量経済学なるものをすら生じているのだが、これは尤もな次第である。科学としてはあくまでも精密化が要求され、そしてその点ではいわゆる数量化に及ぶものはないからである。乍併、社会科学、特に経済学のごとく、純粹に客観的な自然現象ではなく、半ば人間的な世界を対象としている科学に於ては、そういった方法オンリーであることが有効であるか否か、抑々それが正しいものであるか否かということが問題にならざるをえぬであろう。経済学は単なる自然科学ではなく実学である、とはすでに述べたとおりだが、われわれは更にこれに加えて、かつてマーシャルがいったように、「経済学は人間に始まって人間に終る」ものであり、まさしく人間の学であるということを銘記すべきであろう。果して然りとすれば、〈計量性〉ということの機能と限界につき、一段と精密な説明がなされねばならぬ。

そこで一步すすめるが、この場合もわれわれは計量化ということを放棄するのでなく、その効果を認容しつつなおその限界を設定すべきなのである。上のごとく、計量経済学は今日の傾向科学ではあるが、しかしなお開拓未了の分野が多々存在しており、例えば効用の個人間の比較とか、労働の苦痛の測定とかいった問題は、その大なるもので、われわれはそういった分野が今一段と精密に解明せられんことを熱望して止まない。と共に、計量化ということに限界のあることもたしかである。抑々いわゆる自然科学的数量と社会科学的数量との間に差異のあることは勿論で、これを一緒くたにして扱うことは問題だが、そのことは暫く措くとして、問題はすべてが計量化されうるか否かということで、実際計量しえない部分が多々あるのであり、且つそういった数量化できない部分にこそ、より重要なファクターがあるのである。われわれはこういったことについて確とした認識を持し、計量化され、又はしうる分野と、そこからはじき出された、いわゆる質的人間的分野とを共に綜合するとき理論をなすべきなのである。こういった全体的綜合的経済理論こそ、まさに今その樹立が求められるところなのである。(なお、はじき出

された分野も確率として依然数的に表現されうるとの見解もあるが、われわれはこれをとらぬ)。

そして、更に今一步すすめて、想起せしめられるのは、理論構成につき経済学の鼻祖アダム・スミスがなした正確と適正との区別である¹²⁾。今ここで詳細を展開するの紙数にめぐまれぬことを遺憾とするが、アダム・スミスにとって経済学とは単なる一個の社会科学ではなく、法及び道徳を含む総合的全体科学なのである¹³⁾。しかして例えば物価が市場における需要供給の midpoint に定まるとは、単に機械的な競争の結果然かなることではなく、まさに社会全体の意志が一致して〈適当〉と思惟したところに落付くということの意味したのである。簡単にいえば、その場合の midpoint とは、正確ということではなく、まさに適当と思惟された水準であるということの意味したものであり、従って又これは前者の量に対し質的価値を表現するものなのである。スミスがかかる価値の担い手として中産階級を思念していたことはいわれているとおりである。われわれが求めるのも、かく、単なる精密ではなく、適正な、より質的なものを含む全体的な理論なのである。

しかして、このことについて現在一、二の試みが展開され、例えば最近やかましく唱導される未来学なるものでハードな欲求、ハードな技術といった系列に対してソフトな欲求 (選択的欲求)、ソフトな技術の開発が唱導されたり、各システムを総合してインター・ディシプリナリな科学、いわゆる社会工学なるものが提唱され、人目を惹いている如きだが、しかし私はこれに同調しえないのである。詳細については省略するが、いわゆる上述の〈総合〉化の要請に合致しないからである。以下私は代ってその一つの試みとして、ここに英国の道徳哲学者 G. E. ムーアの方法を紹介したいと思う。

VII

G. E. ムーアがラッセルの友人で、高名な分析哲学者であることは喋喋する迄もないが、彼がその倫理学において展開したところは今われわ

れのこの問題に対して示唆するところが多大なように思われるのである。勿論ムーアの対象は個々人の倫理的判断であり、決して国家や社会、経済の領域についてではない。その限り限界のあることはいう迄もないが、唯その方法はこれに移して、社会科学に適用する時、極めて有効なものをもっているのではないかと思われる。ムーアの倫理説を約言すれば、善そのものは如何なる自然的なるものからも導出されず、唯善いものは善いという以外施しようのない、直覺的な事実であるが、このことと共に、これを達成する手段については然らず、これを善以外のもの説明することが可能であるばかりでなく、又しかすべきで、結局善はその結果と善そのものの内在的価値との合計乃至バランスシートによって決定する外ない、というのがその骨子で、恰かも前述のごとき経済学の理念に合致しているのである。次に少しくムーアの学説について紹介しよう¹⁹⁾。

まず前述のごとく、ムーアによれば、「それは善である」という命題において、善とは目的としての善か、手段としての善かであって、善にはこの二つのものがある。しかして、目的としての善はそれ自身に於ける善であって内在的価値であり、如何なる自然的価値や事物（例えば快樂とか公共の利益）などといったものからは導出されることがなく、従って直覺的にこれは善いとしかいいようのないものである。これに対して手段としての善は然らず、それは内在的善に至る手段としての価値で、行為に関する因果的判断を含むものである。因果的判断を含むということは、それに対して証明も反証も可能であり、いわゆる自然科学的研究の対象となりうる事柄だということである。善にはこういった二つの種別があるにも拘らず、従来の倫理学はすべてを直覺の一義によって決し、手段価値は抹消したところにそこ誤りがあったわけである。❷

ところで、ムーアはすすんで、この区別をみとめた上で、現実の行為についての評価を問題にし、「この行為は最善である」という評価を下す場合それは次の如き三つの場合を意味するという。即ち(1)その行為それ自身が他の行為より大なる内在的価値を有し、且つその行為の結果は

内在的には価値も欠陥もない場合。(2)その行為の結果は内在的に悪であるが、その行為自身の内在的価値が大きいため、差しひきしても他の他の行為よりも価値が大きい場合。(3)その行為の結果が内在的に善であり、その行為の内在的価値との合計が他の行為に比して大である場合、の三つがそれである。かくみてくると、一つの行為の価値は、その行為そのもの及びその結果の示すバランスシートによって決まるということ、ここにベンザムの功利主義の影響があることは、たしかだろう。これによってみると、ムーアは明らかに加算の原理を適用しているわけである。

しかしながら、このことはムーアが内在的価値、目的善の思想を第二義としたということではない。かなりややこしいが、ムーアは行為の内在的価値そのものを肯定した上で、なお且つ現実の結果に至るには道徳的以外の方法をもってする行程が多々あるということをしているのである。とすれば、上の如くムーアは善悪を機械的な加算の原理にもとづく総計として量的に捉えうるものの如く考えているようだが、しかし事実はずからず、善悪の総計は有機的全体における全体と部分との関係として捉えぬばならぬとし、部分はいくら集めても全体とはならず、全体は部分の合計以上のものであり、しかして手段価値は目的としての善、即ち内在的善の部分又は条件としての意味しか持ちえないとしているのである。

これを社会的分野に移していうと、結局、進歩とか改善とかいうことは、（こういうことをいう限り未だラヂカルではないが）道徳的改善のみを意味するものではないが、しかし究極的には内在的価値によって計らるべきであるということであって、彼は自説を次の如く要約し、その真意を語っているのである。曰く、

「われわれがこういうふうに、すなわち進歩あるいは改善とは、事物のよりよい状態への変化をいっているとの意味において、「よりよい」という言葉を使用する時、われわれはたしかに幾分かは、より立派な内在的価値をもっている事物の状態を考えている。そしてわれわれは確か

に、改善という言葉によって単に道徳的改善のみを意味しているのではない。道徳的状態の改善は、他の状態が改善されない場合にも、疑いもなく内在的価値における進歩であろう。しかし、道徳的状態に変化がないとしても、なお他の方法での——例えば経済的貧困や純粹に物質的害悪の減少による——改善の余地があるということを、われわれはたしかに主張すべきである。しかし内在的価値における真の進歩の度合を考察するとき、現実に送られる生活が實際的に内在的によくなった度合いと、単に善い生活を過すための手段において改善が行われた度合いとの間には、混同の危険がたしかにある¹⁵⁾。」以上のことは、当面の経済学における事実と価値との関係の理論にとって極めて示唆的である。経済学は善い生活への手段としてその価値をみとめられ、そしてそれが内在的価値における進歩に与りうる度合いは多大でありうるが、しかしそれをもって究極的なものとみなすことはできず、絶対的の意味における善は、唯々道徳よりくるものである。ということこそはこれにいつているのである。（又一面手段善を積分して内在的善に至りこる道もありうるということを含意するものであって、両者は截然と別異されるものでないということも、たしかではあるが。）

なおわれわれは以上のことに加えて、ムーアが、内在的価値はカントのいうごとき、理性の命令ではないが、さりとて、単に純粹に心理学的観念でもないとして、両者の間を別異したことに同感しうるのであって、そこにすぐれて現代的な道徳観を見出しうるものである。このことをも付言しておきたい。

VIII

以上によって経済世界について私のいわんとするところは大体終わったようだが、しかしさにあらず、今ひとつ重要なこと、本稿の核心ともいべきものを付加せねばならぬ。今ひとつ重要なこととは何か。上に私は主として〈生産力〉のことを中心に述べて来たが、しかし実はそれは主役ではなく、いわゆる生産関係即ち個人対社会の関係が残されてお

り、これこそがそれなのだが、しかも本問題は文字どおり難問中の難問であり、就中現代において然りである。次に少しくこのことについて述べてから、この一文の結論に入りたい。

かってフオイエルバッハは将来の人類の在り方を忖度してその『キリスト教の本質』において人類性の理念を掲げ、しかして人間がもつべき性格として理性・意志・愛の三者をもってし、個々人として孤立してあることではなく、共同体としてあることこそわれわれの究極であるとした。若いマルクスがこれを受けてその『哲学経済学手稿』において類的普遍としての人類の解放を打出したことは、あまねく知られるとおりである。われわれはすでに法的には解放され、法の前に万人平等となった。しかし経済的には未だ然らず、国民と市民、公人と私人の間の分裂があり、これを解消することが急務であることというのがその要旨である。マルクスのかかる理念はまことに崇高で、われわれ人類にとって不磨の目標であることに変わりない。乍併、これを現実にあてはめた場合まことに容易ならぬものがあるのである。特に現代において然りである。階級間の対立は勿論部分社会相互間や個々人間の対立はまことに深刻で、どのひとつをとってもむつかしく、マルクスが考えた階級間の対立といった単純なそれをもってしては律し切れないほどだからである。就中今日この国の経済においてその感が深いのである。労資の対立はもとより、大企業と中小企業、商工業と農業との対立、生産者・中間業者・消費者の対立、ホワイトカラーとブルーカラーの対立など。更にこれを経済そのものに即していえば、今日物価・賃金・雇傭間のそれがあり、各々は独立変数化してその間に何の統合も脈絡もありえぬのである。より具体的にいえば、政策担当者がその場合持ちうる選択の自由度は安定に関する限り物価か、賃金か、雇傭か、何れかの一つであって、二つながらみたしうることは原則としてありえないということである¹⁶⁾。

かかる中であってわれわれはこれを如何に調整してそこに類的普遍としての人類の共同体を実現しうるであろうか。ここで私は又しても終末論のことを想起せしめられるのである。始源論には例えばアダム・スミ

スやルソーにおけるごとく、合理的な人間関係論があった。しかしそれは出立に当たっての了解事項であって、やがて人類はバラバラに分裂していったのである¹⁷⁾。これに対して終末論はこれを収束するものであって、今のわれわれにとってすぐれた考え方である。人の死なんとするや声やよしとは、まさに連帯回復、人類性の自覚の叫びであろう。終末に当たって人々はその始源の志向を回復し、合一するものである。乍併この点でもその原則的真理を承認しつつも、われわれは現実面に於ては当代の終末論には組しえないのである。例えば前述の大木英夫氏は「都市と新しい共同体の問題」なるエッセーに於て、人間の連帯意識をどうして回復するかということを論じていられるのだが、ここでも楽観的調子が目立つ¹⁸⁾。あたらしい都市においてその表見の孤立とほうらはらにいわゆる一体化がすすんでおり、キリスト教のいわゆる〈潜在教会〉が漸次成熟し成長しつつある、というように論じていられるのだが、しかしわれわれはそのあまりの神の賜物へのよりかかりに同調しえないのである。尤も私は氏のいわれることが全面的に誤りだというのではない。いわゆるコムニクテイの成育が当来社会の基盤となり、又なるべきことに誤りない。しかし唯それだけでは何ごともなされえないのである。ここで私は住民相互の努力と共に、自治体や国家、就中もっとも多く〈国家〉のちからに期待するものである。例えば最近政治学者松下圭一氏は公害の問題についてもっとも多くシビルミニマムに期待すると述べていられるが、しかし更にこれに〈国家〉を加えたいのである¹⁹⁾。氏は現代の国家は結局自民党てう一党の国家だから信ずるに足らず、地方住民の自覚の外ないといわれるが、短視眼的な見方だろう。公害問題についてならないざしらず、否公害問題についてさえ、国家の経済政策を描いては何一つありえぬのである。こと経済全般に関しては更に、道路や土木工事、教育施設、果又交通機関など何れの一をとってみても然りであろう。終末論は共同体意識論と共に強力な国家論を俟ってはじめて完全なのである。なおここにいう国家なるものが現実の国家ではなく、あるべき国家のいいで、その限りシビルミニマムから発することは確かだ。

IX

以上のごとくであるから、われわれはまずもって全力をふるって国家の革新を推進すべきで、ここにマルキシズムの変革的精神の登場してくる必然性がある。実際われわれはマルクスが理論の実践的性格についてなした卓見に対しどれほどの讃辞を捧げても過ぐるところはないだろう。とはいえ、ここではマルクスのいわゆる上部構造からする下部構造への反作用ということに酷似して、ある意味で現代にマッチするともみられるガールブレーズの〈対抗力〉理論を紹介することによって、マルクスに代らしめようと思う。マルクスの精神は極めてすぐれているのだが、現代の複雑多岐なる状況に照していささか単純に失するからである²⁰⁾。

ガールブレーズは周知の如く資本主義は大企業体制となって極まるが、しかしその中にテクノストラクチャーなる鬼子を生起し、このものはイデオロギー的に中立であるばかりでなく、利潤の極大原理を止揚することにより資本主義に対して革新的であることによって将来の原理となり、国家と接合してついに旧秩序を止揚するに至るというのである。この辺りのことはよく知られているとおりであるが、しかも彼はなおこれに安んぜず、かかる革新原理に対し一方では労働階級の、他方では科学・教育・芸術の対抗力を生起せしめ、その弁証法的確執によって、われわれの文明は救済されるであろうと説くもので、就中私は後者の、科学・教育・芸術が経済体制に対して対抗力を自発し、これを規制するに至るといった、そのダイナミズムに大いに共感するものである。まさしくこれはマルクスの反作用に通ずるものであり、〈経済〉の疎外を制圧しうる精神と現実的努力とをいったものなのである。ここに私は人間が経済の圧力から自己を解放する一箇のすぐれた教説が与えられていることを感得するもので、氏のいうところが極めて現実的でありつつ理想主義的なものをもっていることに感銘するものである。以下簡単にその要旨を紹介すると、氏はこれを六つの側面にわたっていっているの

であって、次のとおりである。即ち²¹⁾、

(1) その第1は、兵器競争から科学的技術的競争への移行で、例えば「宇宙探険競争」「空陸での高速通信における競争」「海底や地殻下の地域の探険競争」「天候を変更する研究領域における競争」などで、これらは兵器競争がもつ巨大な需要造出機能と、大型技術促進機能の二つの利点を十分に代表しうるもので、上に私が原子力の平和的利用への移行としてとりあげたところのものと合致している。

(2) その第2は、科学者教育者層のもつ、公共的サービス部門への関心である。たとえば、交通問題・住宅問題・土地の国家管理などがそれで、こういった問題については、大企業は成長極大化と技術的優秀性を第一義とするところから関心を示さない。住民と携えて政府に迫りうるものは、かれらを措いて以外にない。公害対策のごときも、この中に入れられる尤なるものである。

(3) その第3は、経済的次元における審美的目標の優先的 pursuit で、これは就中芸術家に期待される。動力線よりも景観を、水力開発よりも自然の河川や国立公園を、ショッピングセンターやレジャー施設よりも史跡保存をといた具合である。

(4) その第4は、経済生活を基礎とし、それを超えた次元で、審美的目標と知的目標を設定することである。これはいう迄もなく、大企業体制の要求する経済的目標を唯一のものとしてはならぬということだが、更にわれわれが経済的に解放されたあとで何を為すべきかということにも関連しており、率直に言って何をなすべきか判らぬといった昏迷のある現状に対して示唆するところが大きい。いわゆる生甲斐の高次元化をいったもので、注目されてよいだろう。

(5) その第5は、すべての人間は収入と引替えに労苦を免れる機会を与えられるべきだということで、有給休暇の拡大ということがそれである。ガールブレイズはその拡大の保証を要請しているのであって、就中この国の中小企業には手痛い提言であろう。

(6) その第6は教育の解放、就中大学教育のそれで、教育こそ人間解

放への道を拓くものであるとの立場から、過度の産学共同に強く反省を求め外、大学は予算に対する支配力を取りもどし、政府や大企業やテクノストラクチャーから独立すべきである、といったことを打出しているのである。

以上のごときガールブレースの、科学教育芸術層からする大企業体制への対抗力といったものも、資本主義体制の枠内でのことであって、おのずから限界はあるものの、その精神は〈経済〉至上主義への反措定を提起するものとして、高く評価されるべきであろう。終末論もかかる現実的対抗力を伴うことによってはじめてその実効を發揮しうるのである。

そして、対抗力の根底に〈実践〉があるべきはいうまでもない。

注

- 1) 『人間不平等起源論』の外特に『学問・芸術論』(Discours sur les sciences et les artes, 1750) (邦訳岩波文庫版あり)
- 2) ニーチェを引用することは大げさで、サルトルの〈無〉辺りが適切かも知れぬ。
サルトルの〈無〉には3つの意味がある。
(イ)人間は自己をたえず時間化することによって無である。(ロ)人間は何ものかについての意識としてと同様自己自身についての意識として現われることによって無である。(ハ)人間は超越によって無である、ということがそれで、この場合は「自己の前への自己の現前」という(ロ)に該当するものである。
- 3) この間のことについてはハイデggerの著作『存在と時間』(Sein und Zeit)等の外これを解説した伊藤勝彦『危機における人間』(理想社)第1章「人間存在のダイナミックス」(5—40頁)参照。
- 4) リッケルトがその哲学体系の中で経済学を自然科学と文化科学の中間科学であるといっていることは、あまり知られていないが、重要なことである。
- 5) ルソーの人間論といえども未だ始源論的甘さをもち、われわれはさらにそこからいわゆる終末論的人間観に至らねばならぬのである。このことについては本稿第8節をも参照。
- 6) 林雄次郎・科学技術と経済の会編『超技術社会への展開』(ダイヤモンド社)の中の渥美和彦氏の「ライフサイエンスの未来」(177—210頁)参照。
- 7) この点については古瀬大六『21世紀人間主義の発見』(日本経営出版会)に詳しい。しかし同氏のいわれるようなことがすべてでないことは勿論で、そういう面としかからざる面とを別異してかからねばならぬ。

- 8) The Voice of America の Forum Lectures の 1 冊で『オートメーション・シリーズ』の中の同氏の論文。邦訳吉本融及坂本百大編『オートメーションと現代』(誠信書房) 197—8頁。
- 9) Elton Mayo: The human problems of an industrial civilization, 1933. 邦訳『産業文明における人間問題』(日本能率協会) 第1・2章参照。
- 10) 例えば正村公宏『経済思想の革新』(NHKブックス)のごときその尤なるもので、詳しくは同書第1章参照。こういった考え方は原則として正しいが、楽観的に過ぎることは禁物である。
- 11) 「経済往来」誌1970年4月号で、矢島鈞次氏は「人間経済学の創造」なるエッセーを掲げてこのことを論じていられる。(23—24頁) 精密な考証ではないが、原則としてすぐれた考え方である。
- 12) Adam Smith's Moral and Political Philosophy (The Hafner Library of Classics) p. 78—90.
- 13) このことについてのすぐれた解説としては高島善哉氏『アダム・スミスの市民社会体系』(角川文庫)
- 14) G. E. Moore: Principia Ethica, 1903. (Cambridge University Press) p. 27—36. 解説としては新開長英『現代の倫理学説』(理想社) 75—77頁。
- 15) G. E. Moore: A Defence of Common Sense, 1925 (Allen and Unwin, London) 邦訳『観念論の論駁』(勁草書房) 84—85頁。
- 16) このことに関しては本論叢の前号(第10巻第3号)所掲拙論「成長経済の倫理」参照。
- 17) スミスとルソーとは共に近代社会の始源論を企図しつつ、その性格は相反している。スミスは個人の独立の方向に、ルソーはその社会との同化の方向に向った。くわしくは岩波哲学講座第5「社会の哲学」所収作田啓一氏の「個人と社会」参照。
- 18) 大木英夫『終末論的考察』(中央公論社) 182—202頁。
- 19) 「展望」誌1970年5月号所掲松下圭一論文「シビルミニマムの思想」参照。
- 20) 対抗力の原語はいうまでもなく Counter-vailing power であり、又テクノストラクチャーの訳語としては〈経営技術者集団〉とでもするのがよいだろう。
- 21) The New Industrial State, 1967, 邦訳都留重人等訳河出書房 p. 329—335, 390—394. なお、又「社会思想研究」誌21巻3号(1969)の中の水野稔一論文「新しい産業国家と人間解放」参照。